



TITLE:

<批評・紹介>中國古代史論集 楠山
修作著

AUTHOR(S):

江村, 治樹

CITATION:

江村, 治樹. <批評・紹介>中國古代史論集 楠山修作著. 東洋史研究 1977,
36(2): 302-307

ISSUE DATE:

1977-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153654>

RIGHT:

批評・紹介

中國古代史論集

楠山修 著

昭和五十一年十一月 著者
出版 A5判 一五二頁

第三章 漢代の賦の意味について——平中説批判——

第四章 阡陌の研究

第五章 秦漢時代の租税制度

第六章 古代中國の居住形態

第七章 商鞅の轅田について

第八章 晉書食貨志の一考察

第九章 阡陌前史

この章では發表年代順に並べられており、この順序にそつて氏の思考の一貫性をたどりうるが、検討の便宜上、私なりに分類して紹介したい。この論集の主要なものは、先秦（とくに商鞅變法以後）から漢の時代に關する論文で、その直接對象とするところによつて、大きく二つに分けることができる。第一、二、三、五章は賦税制度に關するもの、第四、六、七、九章は土地制度に關するものである。ただ第六章は土地制度の問題の背景にかかわる論文である。なお、第八章の對象とする時代は以上の論文とは異なるが、やはり税制、田制に關する論文である。

二

著者、楠山修作氏は、和歌山縣下の各高等學校を歴任され、現在和歌山縣教育研修センター指導主事をされている。本書は、高校教育の激務に携わるかたわら、一九六七年以後種々の雑誌に逐次發表されてきた論文を集めたものである。その中には、高校關係の「紀要」等に掲載され、手に入れることが困難な論文も含まれ、このように論集にまとめられたことは意義あることである。この論集に収められた論文は、ほとんどが手堅い實證論文であるが、その背後には著者の一貫した歴史に對する眼を感じることが出来る。私は、ここでは順次個々の論文の實證過程を簡単に紹介検討し、最後に氏の中國古代に對する見方について若干の感想を述べ、この書評の責を塞ぎたい。

この論集は九章よりなり、章だては次のとおりである。

第一章 算賦課徴の對象について

第二章 更賦と軍賦

まず、先秦から漢の時代の賦税制度に關する論文から紹介したい。第一章の論文は、算賦を人頭税と規定し、女子にはそれが課税されなかったということが綿密に考證されている。従来一般には、男女とも算賦が課せられたと考えられており、なぜ女子にも課せられたかはとりたててあまり問題とされてこなかった。ただ、宮崎市定氏は、女子による從軍・武器製造の例があるとして女子課税を根據づけているが、著者は、これを特別な例として退ぞけ、女子課税

の決定的な證據は存在しないとする。資料の讀み方によって、從來女子課税を示すとされていた記事はそれほど説得的ともいえないのである。それでは、逆に女子不課税の決定的證據が存在するのかもしれない。氏は、女子不課税をうかがわせる例を擧げてはいるが、氏が女子課税を批判したのと同じ意味から不安が残る。氏もこのことは重々承知で、永田英正氏の所論、漢代の錢納税が過重な負擔であつたという説を擧げて女子が男子と同等に課せられた場合の非現實性を強調している。ただ、これは女子不課税の本質的な論據とはなりえないと思う。制度は、現實の社會の變化によって、その當初の意圖とはそぐわないものとなることは當然ありうるからである。永田氏も、算賦の崩壊という文脈でこのことを論じているのである。やはり、氏も認めるように、その發生上の性質が問題となる。氏は、宮崎市定氏の所論に基づいて、算賦に兵役負擔免除の代償としての性質があり、軍事上に淵源があると考えており、女子課税説はこの發生上の性質からも肯定しがたいとしている。人頭税女子不課税説は、資料的には證明が困難であるが、これまで等閑に附されていたこのような問題提起は、人頭税の性格、ひいては古代國家の性格を考える上で大きな意味をもっている。

第二章では、第一章ですっきりしなかった「口賦」に對する見解を整理し、その語の意味は、口錢（未成年者の人頭税二十錢）と賦錢（算賦百二十錢あるいは未成年者の賦三錢）のことであるとし、「口賦」という税目は實在しなかったと斷定するとともに、「更賦」と「軍賦」に對する新見解が述べられている。加藤繁氏は、「軍賦」を算賦をその本來的なものとする軍事費供出であるとし、「更賦」

を兵役服務免除錢としてこれに含めた。一方、宮崎市定氏は、「軍賦」を兵役義務そのものとし、「更賦」の方は加藤説と同意にとるが、人頭税の一つとして「軍賦」から除外した。しかし、濱口重國氏は、「更賦」を兵役に關するものではなく、更役（力役）の義務そのものか、あるいはそれを免れるための過更錢であるとした。これに對して著者は、「更租」「更算」という語があることなどに注目し、「更賦」を「更」と「賦」の二つに分け、「更」は濱口氏の言う過更（錢）、「賦」は賦錢（主に算賦）であるとし、「更賦」という税目は實在しなかったとする。しかし、「更」を過更（錢）とした理由は示されておらず、そのように斷定できるか疑問である。更役の義務、あるいは兵役の免除錢である可能性も殘されている。なお、平中孝次氏は、先に「更賦」の語は免役錢を言う場合と、もつと全般的な「更」と「賦」の兩方を指す場合（この場合、「更」は繇役、「賦」は人頭税）があつたと指摘している（漢書食貨志に見える「更賦」について）立命館文學二六五）。著者は不利な資料を誤記としているが、平中氏のような考えも考慮する必要がある。一方、「軍賦」に關しても、氏は漢書刑法志の「乘馬法」の記述を根據として、「軍」と「賦」の二つに分け、「軍」を兵役義務、「賦」を軍事費、主として算賦を指したとする。ただこの場合も、「軍」という語だけで兵役義務を指す例が擧げられておらず、また用例も二つしかないことから即斷できないと思われる。氏のように解することにより、漢書惠帝紀、惠帝即位の詔の「家唯給軍賦、他無有所與」の句は、高官といえども兵役義務と算賦を免れえなかつたと解することができるが、このことを確認するには別の面からの論證が必要であらう。

第三章は、以上二論文を基礎として、平中岑次氏の「居延漢簡と漢代の財産税」(『中國古代の田制と税法』所收)を批判したものである。平中氏は、算賦を、訾算(財産税)と口算(人頭税)の總稱であると考えたが、著者はここで、算賦には人頭税としての意味しかないことを改めて論證し、あわせて宮崎市定氏の、漢代の賦が人民の兵役義務に由來するという説を再確認している。

以上、三論文は、漢代の賦の意味を明確にすることによって、古代帝國としての秦漢の國家の本質に逼ろうとした好論である。氏は賦という人頭税が秦漢帝國に特有な人民の負擔であり、それが軍事に大いに係ることから、秦漢帝國は「軍事國家」であつたと斷定している。

なお、第五章は、『歴史教育』に掲載された、秦漢時代の租税制度に關する概論である。氏はここで、古代都市、とくに次に紹介する第四章の阡陌の研究に基づいて、田租と算賦、とくに後者の、先に紹介した氏獨自の見解を要領よくまとめ、そして古代税制(とくに賦)の崩壞にまで説き及んでいる。

三

氏の先秦から漢時代の土地制度に關する一連の論文のうち、次の第四章は、從來より數々の學説が打出されている「阡陌」の解釋に關するものであり、諸説を要領よく整理した上で新見解を提示している。この論文は後の關係論文に必ずといってよいほど參考にされており、「阡陌」研究、ひいては商鞅變法研究の必讀文獻となつてゐる。まず氏は、米田賢次郎氏の、阡陌は住宅地の道が農道に轉化したものであるという説と、木村正雄氏の、田間の道のみならず城

内の住宅地の道をも指すという説とをともに退げ、阡陌は、終始、城外の田間の道のみを指したと規定する。つづいて、その道路の性質に關しては、單なる道路とする加藤繁説、直角に交わる眞直ぐな道路であつて大中小の阡陌が存在したとする宮崎市定説をともに否定し、阡陌は田間の大道であるとする。そしてさらに、從來最も有力な説で、小川琢治氏の首唱した、井田制の實在を前提とする、耕地を千畝百畝に區畫する道路とする説も、秦に二百四十步一畝制が施行されたことと、阡陌が千畝百畝を區畫する「あぜ」程度の小道路ではありえないということとを論據として否定する。氏は以上の諸論を批判した條件をふまえ、さらに里と阡陌(とくに陌)とが密接な關係にあつたと假定して、阡陌を一里百家分の土地を區畫する城外の道路であつたとする。すなわち、秦漢の耕地は、東西長さ二千四百步の陌と、南北千步の長さの阡によつて百人分の土地に區畫されたのである。氏の説では、阡陌の阡は千步をあらわし、陌は一里百家の百と關係があり、阡陌の文字を構成する千と百は次元の異つた數値と解されている。しかし、阡陌と里とが密接な關係にあることは納得できるが、道路をタテヨコによつて次元を異にして呼ぶ例が他にあるのか問題である。また、越智重明氏も批判しているように、秦において一里百家を想定することには問題があり、「阡陌」と連語になつてゐること自體、兩者には同質性があるとなす方がいいのではなからうか。しかしかく言つても、氏が阡陌と人爲的な里とを關係づけたことは重大な意義をもつてゐる。すなわち、ついで氏は、商鞅の「開阡陌」と「決裂阡陌」との關係について諸説を整理した上で、「決裂阡陌」と理解し、兩者とも商鞅の阡陌開置を述べる記事であるとする。そして、商鞅こそがこの阡陌と

大いに關係のある「秦漢的な縣の、したがって人爲的行政區畫としての秦漢的な里の、創始者である」(頁七六)と斷定している。氏のこの商鞅阡陌開置説は、商鞅の歴史的位置づけをより明確にしたものといえる。

なお、第九章は、この論集のために書き下されたものであり、阡陌の問題をより廣い視野で歴史的にとらえようとしたものである。春秋戰國において、都市建設とともに、田地を大區分する境界道路が各國で造られて様々な呼び方がされたが、漢の時代になってもそれらは残り、秦の二百四十歩一畝制の阡陌制が中國全土をおおうのは武帝の末年であつたとし、二百四十歩一畝制にからめて三十分の一税に説き及んでいる。ただ、氏自身、執筆中に眼病を病み不首尾なものとなつたと付言の部分に記されているように、この論文は未完の感はぬぐえない。

第七章は、前述の阡陌の問題と大いに係わる商鞅の轅田に關する論文である。王毓銓氏は、轅田に關する從來の説を、(一)賞田説〔換田賞衆〕、(二)賦田説〔以田出車賦〕、(三)食田説〔分公田之稅賞衆〕、(四)授田説〔固定授田法〕、(五)田説〔歲休輪耕法〕の五説に分類した(「」内は王氏の表現)。(一)(二)説は、ともに賞賜のためのある種の土地と考える説であり、ひっくり返めて賞田説と言ってもよい。著者は、以上五説を詳細に検討批判していずれの説にもくみせず、ついで今日學界で最も有力な解釋である守屋美都雄氏の賞田説をとりあげる。守屋説では、商君書境内篇の記述、敵首一級を得た者に田一頃宅五畝を加増したということが轅田の具體的内容であるとす。しかし、この説も、資料上から見た秦の斬敵數の多さ、土地賜與に對する君主の吝嗇的態度などから秦の現實にあわず、また「轅」

の字義の説明もなされていない。さらに、守屋氏が擧げている荀子議兵篇の記事、「五甲首而隸五家」も、田宅を與えて五家を使役させるのではなく、五人組の長とならせただけであるとする。それでは轅田とは何かというと、氏は、轅は、爰・援と音義共通で、「たすける」という意味があり(とくに援には軍事的協力の意味がある)、賦(軍需物資、軍事費)を負擔提供する田であるとする。春秋戰國において、諸國では田制改革と賦制改革とはほとんどあいつもなつて行なわれており、秦の商鞅の改革でも、新縣設置にともなつて阡陌が開かれ、そこに移住せしめた成人男子を中核とする單婚家族に轅田が與えられ、それに基づいて賦が徵收されたのである。そして氏は、このような轅田に係わる賦が漢代の算賦の起源をなすと考えている。しかし、このような秦における土地授與の反對給付としての特殊な賦が、成人男子一般に課せられた、より普遍化した賦にいかに関連していったのが問題となろう。そして、算賦に田地の授與に係わる何らかの根拠が残っているのかどうかも考えてみる必要があると思われる。

なお、氏の轅田に對する新解釋が發表された後に出された説として、古賀登氏の、爰(轅)を「かえる」と讀んで爰(轅)田を換え地とする説がある(「阡陌攷——二四〇歩——一畝制の成立問題を中心として——」史學雜誌八三—三三)。また、越智重明氏も、爰(轅)を「かえる」と讀むが、爰(轅)田を賞田と考えて「所有」者あるいは收稅者をかえる田であるとしている(「轅田をめぐる」榎博士還曆記念東洋史論叢)。轅田の意味に關してはまだまだ考慮の餘地があるように思われる。

四

以上、論集の論文を、検討の便宜上二つに區分して紹介してきたが、最後の轅田の論文に至って、氏においては賦税制度と土地制度とが統一的に考えられていることが明らかにした。氏は、商鞅による新縣設置の意義を重視し、「開阡陌」「轅田」「賦」が新しい家族制度と結合して一貫した關係にあるものとしてとらえているのである。そして、この商鞅の改革に、「軍事國家」としての秦漢帝國形成の原點を認めようとしている。氏は、この「軍事國家」の本質を「賦」に見るのであるが、ここで人頭税としての賦の性格を考えてみる必要がある。人頭税は、從來、個別人身的支配を具體的に體現する制度とみなされてきたようである。しかし、このような見方は、人頭税を單なる支配の手段としてしかとらえていない。氏の賦を「軍事國家」の本質ととらえる見方は、賦を納める側にある民衆を積極的に評價する立場とも言える。第五章では、氏は「賦を供給することは、國政に参加することであり、義務であるとともに權利でもあった。賦を納め、爵を授かる、戰鬪能力ある男子こそ、眞の意味での古代帝國の成員であった。」(頁八九)と述べている。しかし、氏が商鞅の改革と賦の制度との關係を強調するとき、民衆の側からの見方がぬけ落ちてしまっているように思われる。賦の制度が上からおし進められたことのみを強調することは(商鞅の改革の強調はそうように印象づけられるが)、人頭税の個別人身的支配の手段としての性格を論證する結果となるのではなからうか。賦に民衆の側の自發的意志のあらわれを読み取ることはできないであらうか。賦の成立を商鞅の改革にのみ限定せずに、春秋戰國諸國の民衆

の動向と關係づけて考えてみる必要があると思うのである。

なお、氏の中國古代國家の理解には、上述の「軍事國家」の概念とならんで、「都市國家」の概念が大きな位置を占めている。氏の阡陌説は、この中國の都市國家論を前提としており、第六章は、中國「都市國家」説(とくに宮崎市定氏の)の正しさを再確認したものである。

最後に、以上の論文の中で關係づけてふれることのできなかった第八章について簡単に紹介しておきたい。氏は、宮崎市定氏が、西晉の戸調式を考える上で、晉書食貨志の記事の二個所を衍文としたことの正しさを再確認した後、他にも二個所の衍文があることを指摘する。すなわち、古來女子には力役を科さないのが鐵則とされたことから、「男女年十六已上至六十爲正丁」の「男女」は衍文とする。また、「其外丁男課田五十畝、丁女二十畝、次丁男半之、女則不課」も、「次丁男半之」の「之」と「女則不課」の「女」とをいかに解するか意見が分れているが、「丁女二十畝」を衍文とすれば問題は解けるとする。氏は、「之」を上「課田五十畝」、「女」を女性一般ととるのである。そして、以上四個所の衍文を設定して晉書食貨志を読みなおし、西晉人民(すべての庶民)の税役負擔の内容を明らかにしている。すなわち、西晉税制は、全丁男・次丁男を對象とする課(租)と役を根幹とし、それに戸を對象とする調、田(私有地)を對象とする義米(地税)があり、さらに課の田に環授があつたことから、これは均田制と呼んでも不都合はないと結論づけている。この論文は宮崎市定氏の考えを一步進めたものであり、これからの均田制研究に資すること大であらう。

この論集に收められた諸論文は、中國古代國家の理解に對して重

大な様々な問題を内包している。しかしここでは自分の關心にひきつけて問題をとりあげたため偏った評となつてしまった。また、筆者の淺學と恣意的解釋により、紹介において著者の眞意を盡してないところがあると思われる。著者の御海容をお願いする次第である。

(江村治樹)

福島繁次郎著 ■増補復刻版刊行

中国南北朝史研究

◆推薦 宮崎市定

豫約限定出版
〔名著出版刊〕

隋代以降の中國の歴史は、「科擧」と運命をともした。中國人の民族性、中國の將來性等を論ずる上にも科擧を度外視することはできない。——著者は、科擧に先行する官吏登用の諸制度と取組んで二十七年、未開拓分野にひとり専念した。本書は、昭和三十七年、著者が惜しくも急逝された後上梓された遺著で、このたびの復刊企畫はこの方面研究者の要望に應えようとするものである。「南北朝・隋・唐時代の人物登用」「北魏の考課と停年格」「北周・北齊の村落制」「北魏孝文帝の考課と俸祿制」が主な内容で、更に三編を追加し、中國の科擧の研究、南北朝の村落制の研究に大きな貢獻をなす貴重な成果といえる。

昭和53年春刊行

■A5判上製四八〇頁

■定価六〇〇〇円

豫約受付(ハガキでお申込みください。)

〒520 大津市錦織2-1-29 福島笑子

又は、〒112 文京区小石川3-10-5 名著出版